青年期中期の生徒の進学準備と自己概念との関係

― 中学生・高校生調査結果の分析 ―

池田　輝政・岩田　弘三・中島　直忠

本研究では，受験準備状況にある青年期の生徒の自己概念を測定し，彼らの複雑な人間形成の断面を明らかにする。適切な自己概念の形成は，とくに中等教育における進路指導の課題となっており，研究関心からも重要な分析概念となっている。

まず，自己概念の尺度を構成するために，自記式の質問紙を作成し，これに対する（中学３年生，高校1･2･3年生の集団から成る）4,948名の回答者の評定結果に基づき，因子分析を行った。

その結果，自己概念の尺度として，自己能力観，対人関係観，自己嫌悪感，自己疎外感の４つが得られた。自己能力観は，ものごとを遂行する積極さや自信を表現する尺度である。対人関係観は，周囲や社会的環境における人間関係への自己信頼の強さに関係する尺度である。自己嫌悪感は，内的な世界に向かって自己を批判的に記述する傾向性と関連している。自己疎外感の尺度の場合は，自分を取り巻く周囲の人間や環境から自己を否定的に切り離す傾向性を表現している。

つぎに，自己概念の発展的様相を，学年間差異によって推測することを試みたが，自己能力観，自己嫌悪感の各尺度において変化が現れやすい。学年が進むにつれて，自己能力観では楽観的傾向が増え，自己嫌悪感では悲観的傾向が増えると推測される。

最後に，自己概念の各尺度と成績および学習時間との関連を調べた。相関関係によって判断する限りでは，自己能力観以外の自己概念の側面では，学習時間が過度（週あたり42時間以上）に増えると，かえって悲観傾向が増加（あるいは楽観傾向が減少）する。また，各尺度いずれをみても，学習時間に比べて，成績との関連が強かった。しかし，総合的に判断すると，成績，学習時間と自己概念との関係は単純な関係にない。